

マタイ受難曲の音楽的構造(第1回)

第19号で山田様がマタイ受難曲冒頭合唱の歌詞を日本語訳するに当たって、考察あるいは苦心されたこととお書きになりました。これまで筆者はバッハの声楽曲をたくさん歌って来ましたが、正直なところそのテキストを誰が日本語訳したかについては無関心でした。しかし山田様の文章を拝見するとこれは重大な問題であることがわかります。オリジナルのドイツ語テキストを解釈し日本語化することは、やり方によってはテキストそのものの解釈を変えてしまうほどですから、山田様のおっしゃる「冒頭のドイツ語の歌詞をどう訳すべきか。この4月に県立音楽堂で筆者にとっては4回目のマタイ受難曲を別の合唱団で歌ったが、この公演で字幕の対訳を任せられず悩んだのがこの問題だった。」という述懐は私にもよく理解できます。

聖句(聖書の言葉)やミサ通常文、祈祷文その他の定型文は教派によってそれぞれ承認された日本語訳があり、出典を明らかにした上でそれらを採用すれば間違いない(それでも昔ながらの文語訳を使うか、あるいは現在採用されている口語訳を使うかは大きな問題で、特に「祈りの言葉はやはり文語でなくては」という意見は少なくありません)のですが、韻文であるコラールや自由詩、とりわけ自由詩は作詞者(「マタイ」ではピカンダー)の靈感に満ちたテキストであるだけに、それを一編の詩として、意味を伝えながらも散文的にならず、詩的な香気を感じずる日本語に再構築することはさぞや難しい作業であろうと思います。筆者は語学的にも文学的にも、このような仕事をする能力を全く持ち合わせていませんので、歌詞についての問題は、山田様にお任せすることとし、もっぱらそれ以外の音楽的な構造について考察したいと思います。本号のタイトル「マタイ受難曲の音楽的構造」は今後何回か連続して、あるいはそのほかのトピックを挟んで続くことになりそうです。演奏会本番までにまだ1年半以上の時間がありますので、あらかじめ回数を決めず、じっくりと考察しながらこの音楽の全体像に近づいてゆきたいと願っています。しばらくの間おつきあいください。

さて本題ですが、演奏に最短でも2時間半を要する(ヴォーカルスコアの重さは834グラム!)、バッハの作品中最大の音楽であるマタイ受難曲は、以下のごとき大きな編成を持っています。

CORO I (独唱も器楽も含むアンサンブル I のこと)

独唱 ソプラノ、アルト、テノール、バス

合唱 ソプラノ、アルト、テノール、バス

フラウト・ドルチェ(縦型フルート、リコーダーのこと) I, II、フラウト・トラヴェルソ(横型フルート) I, II

オーボエ I, II、オーボエ・ダモーレ I, II、オーボエ・ダカッチャ I, II

ヴァイオリン I, II ヴィオラ ヴィオラ・ダガンバ

通奏低音(チェロ、ヴィオローネ《コントラバス》、ファゴット)

オルガン

CORO II (アンサンブル II)

独唱 ソプラノ、アルト、テノール、バス

合唱 ソプラノ、アルト、テノール、バス

フラウト・トラヴェルソ I, II、オーボエ I, II、オーボエ・ダカッチャ I, II

ヴァイオリン I, II、ヴィオラ、ヴィオラ・ダガンバ

通奏低音(チェロ、ヴィオローネ、ファゴット)

オルガンまたはチェンバロ

ソリストのうち、登場人物であるエヴァンゲリスト(聖句の朗誦者、福音史家とも云う)、イエス、ユダ、ペトロ(ペテロ)、総督ピラト、大祭司カイアファ(カヤパ)、ピラトの妻、女中、証人は CORO I に配置されています。これらの独唱(独奏)者をすべて別人が担当するなら、それだけで多くの人数が必要となり現実的ではありません。そこで通常 CORO I と II のオーボエ属楽器は持ち変えて、一人の奏者が兼任することが多いのです。歌手もエヴァンゲリストとイエス以外の登場人物は、レチタティーヴォとアリアを歌う4人のソリストと合唱団員に振り分けられるのが普通です。なお通常エヴァンゲリストとイエスはその役に専念し、他の登場人物やアリアを歌うことはありません(それぞれが実力と人気の高い歌手であればアリアを歌う例もあります)。そしてできればオルガンとチェンバロは CORO I と II の音色を際立たせるために各一台ずつほしいところです。

合唱の役割は大きく三つに分かれます。まず聖書(マタイ福音書第26,27章)に登場するイエスの弟子たち、祭司長・長老、兵士、群衆らの合唱。次にコラール、そして自由詩の合唱です。はじめの部分で合唱は、登場人物の立場や彼らを取り巻く状況、人数の違い(12人から数百人)に応じて歌い分けねばなりません。その難しさと重要性を、6月11日の練習で安藤先生が強調されました。

「マタイ受難曲」は第 I 部29曲、第 II 部39曲の計68曲から成っています。旧バッハ全集(1850年からバッハ協会により刊行された最初のバッハ全集、1900年完結)版では78曲でしたが、新バッハ全集(その後の研究成果を盛り込んで1954年から新バッハ協会が刊行し、2007年完結)では自由詩やコラールによって中断されるまでの聖書の言葉(聖句)をまとめて1曲と数えるために、曲数としては少なくなりました。聖句に作曲された音楽は、ソロと合唱が交代するところで曲の番号の後に小さなアルファベットをつけています。これらの措置は編集者の判断であり、バッハ自身は各曲に番号を振っていません。次にその内訳を楽曲の構成から見てみましょう。

まず**テキスト**の種類から分けると、聖句に作曲したものが27曲、コラールが13曲、コラールと自由詩の組み合わせが2曲、自由詩による曲が26曲で合計68曲になります。

次に**編成**によって分類すると、合唱の Coro 1 と 2 が合同して歌うのが13曲、その内11曲は4声の単純コラール、残りは第29曲のコラールファンタジーと、第63曲の合唱「本当にこの人は神の子だった」です。Coro 1 と 2 が二重合唱を歌うのが2曲、冒頭の合唱曲「こちらに来て娘達よ、私の嘆きを聴いて」(リピーエーノのコラール「おお神の子羊」が加わる)と終曲の合唱「私は涙ながらにひざまずき」です。Coro 1 のソロ(またはソリ)が27曲(自由詩のレチタティーヴォとアリアが各1曲、他はイエス、エヴァンゲリストほかの登場人物の楽曲)、Coro 2 のソロが8曲(すべて自由詩のレチタティーヴォとアリア)、話が細かくなりますが Coro 1 のソロ(ソリ)と Coro 1,2(二重合唱を示す)の合唱の組み合わせが7曲、Coro 1 のソロ(ソリ)と Coro 1+2(合同して歌う)の組み合わせが1曲、Coro 1 と 2 のソロが同時に歌われる曲が1曲(第33曲)あります。

最後に**音楽の形式**で見ると、合唱が15曲、ソロが22曲、ソリ(複数の独唱者による楽曲)が12曲、ソロと合唱の組み合わせが9曲、そのうち1曲はレチタティーヴォとコラール(第19曲)、もう2曲はアリアと合唱(第20,30曲)。ソリと合唱の組み合わせは9曲ですべて聖句による曲。そのほかに1曲だけデュエットと合唱の組み合わせがあります(第27曲)。

以上の分類は特別な意味を持つものではなく、あくまで便宜的なものです。しかしまずはここから始めて、複雑な「マタイ」の音楽的構成を順次明らかにしてゆきたいと思います。その手がかりにと今、自分用に作成中の全68曲一覧表ができあがりましたら、いずれ本号の付録として皆様にもご覧いただくつもりです。

【後記】 早いもので楽事通信は20号を迎えました。今回は「マタイ受難曲」の全容にともかくも外見から迫ってみようという願望から出発しましたが、のっけから予想通りというか思いの外というか、多くの様相が見えてきました。ひとまずここまでは文献を参照せず、楽譜のみを資料に独断で書いてきました。間違いがあれば随時訂正いたしますので、そのつもりでお読み願います。しばらく面倒くさい議論が続きますが、どうかお許し下さい。(新井)